

ユーラシア古語文献の文献学的研究
NEWSLETTER
No. 5 2004/2/23

目 次

活動報告
研究会報告の要旨
ユーラシア古語文献研究叢書について
次回研究会の開催について
編集後記

活 動 報 告

第 10 回、第 11 回研究会が開催されました。

第 10 回研究会 (「極東地域における文化交流」研究班と共催)
日時 2004 年 1 月 15 日(木) 午後 1 時～午後 6 時
場所 京都大学文学部 新館 2 階 第 6 講義室

「高麗人の元朝における活動 - 李齊賢の峨眉山行を例として」
金 文京 (人文科学研究所 教授)
「覆朝鮮本について」
藤本 幸夫 (富山大学 教授)
「李朝の日語教育とその教科書：倭語類解を中心に」
鄭 光 (韓国 高麗大学 教授)

第 11 回研究会
日時 2004 年 1 月 28 日(水) 午後 2 時～午後 5 時
場所 京都大学文学部 羽田記念館

「Jens Peter Laut 教授を囲んで」
フライブルグ (Freiburg) 大学教授 Jens Peter Laut 博士を囲み
ウイグル語仏教文献研究についての討論会が開かれました。

(この研究会は、科学研究費補助金基盤研究(A)(1)「中央アジア古文献の文献学的研究
ロシア所蔵未発表文献の解明」(研究代表者 庄垣内正弘)の主催によるものであった関係
上、一部の関係の方以外にはとくに事前のご案内をいたしませんでした。ご了承ください。)

研究会報告の要旨

第9回研究会(2003年11月29日於京都外国語大学国際交流会館4階会議室)

1. 報告 「中央アジア古文書のカタログ化に関する諸問題」
ヌールヤグディ・トショフ (Nuryoghdi Toshov)
ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所研究員
2. 報告 「ヒヴァ市イチャン・カラ博物館古文書収集プロジェクトにおける諸問題」
カミルジャン・フダイベルガノフ (Kamiljan Khudaiberganov)
ウズベキスタン国立イチャン・カラ博物館上級研究員

1. 第9回研究会報告

報告者 ニールヤグディ・トショフ
「中央アジア古文書のカタログ化に関する諸問題」

現在、報告者は京都外国語大学の堀川徹氏を中心に進められている、中央アジア各地の古文書研究、および、そのカタログ化に関するプロジェクトに参加している。本報告は、上記プロジェクトの一部を成す、ヒヴァ文書のカタログ化作業において生じた様々な問題点を具体的に挙げながら、当該地域古文書研究の現状と将来の課題を提示しようとするものである。なお、本報告において述べられるヒヴァ文書の特徴であるとか、また、そこから生起する様々な問題点といったものは、けっしてヒヴァ文書にのみ見出されるという性質のものではなく、中央アジアの古文書研究全体についても妥当する場合が多い。ただし、ここではヒヴァ文書、その中でも特に私権に係わる文書 所謂「イスラーム法廷文書」 に分析の対象を限定しながら話を進めてゆく。

(1) 使用言語の変化

ヒヴァ・ハーン国の領域は、主に定住民が居住する南部地域と、遊牧民が居住する北部地域とに二分されており、前者は文官に、後者は武官により統治されるという、一種の二重統治体制が布かれていた。ヒヴァ・ハーン国史の専門家であるブレーゲル Y.Bregel によれば、ヒジュラ暦 1274 年 5 月(西暦 1857 年 12 月~1858 年 1 月)を境に、南部地域で作成された法廷文書の使用言語が、従来のペルシア語からウズベク語へと完全に入れ替わったという。

報告者がタシュケントの中央古文書館、および、ヒヴァの国立イチャン・カラ博物館に所蔵されている当該地域の法廷文書を実際に調査したところ、上記の指摘は南部地域にかぎらず、ヒヴァ・ハーン国領内全域についても当て嵌まることが判明した。さらに、報告者がタシュケントの科学アカデミー東洋学研究所所蔵のヒヴァ文書のカタログ(A.Urunbaev, T.Khorikava et al, Katalog Khivinskikh Kaziiskikh Dokumentov XIX-nachala XXvv., Tashkent-Kioto, 2001)にお

いて、1274年以前に作成されたにもかかわらずウズベク語文書と記載されているケース、および、これ以降に作成されているにもかかわらずペルシア語文書であると表記されているケースの各々についてその正否を調査したところ、その大半がオリジナルの文書起草者による年代の書き誤り、ないしは、カタログ編纂者の単純なミスによる間違いであることがあきらかになった。

つまり、上述のブレーゲルの指摘は妥当なものであり、ヒヴァの法廷文書はその使用言語によっておおまかな年代を決定できるのである。ただし、ヒヴァ・ハーンの勅令は、作成年代に拘らず殆どがウズベク語で書かれていることにも注意する必要がある。使用言語による作成年代の比定が可能なのは、あくまで法廷文書にかぎられるのである。

(2) ヒヴァ文書のウズベク語

現存するヒヴァの法廷文書は、その大半がウズベク語で書かれている。これらの文書を扱う場合、そこで使用されるウズベク語の特徴についても注意する必要がある。まず、ヒヴァ文書においては、現在のウズベク語には見られない特殊な語彙がたびたび使用される。また、生格と対格が混同されたり、ときには両者が欠落したりといったような、文法上の特徴も見出される。さらに、ヒヴァ文書においては正書法の混乱が著しいことであるとか、通常のウズベク語の綴りにあらわれるアルファベットの b や p が、時に f に転化する、といった事実も留意点として指摘できるであろう。

(3) 術語をめぐる問題

古文書学においてもっとも困難であり、また同時に、もっとも重要な位置を占めるのが、研究対象となる文書で使用される術語の研究である。ヒヴァ文書の術語研究は未だ初歩的レベルにとどまっております、そもそも文書の種別名称=たとえば「証書」や「勅書」といったようなものとして当時どのような術語があてられていたのかさえ不明なままである。ここでは、ヒヴァ文書研究に際し特に重要となる二つの点について言及しておく。

i)一般的にヒヴァ文書は、とくにその書式面において、隣接するブハラ・アミール国領内で作成されたペルシア語文書の影響を受けているものと推定される。また、ヒジュラ暦 1274 年以前のヒヴァ法廷文書が専らペルシア語で書かれていたことを考慮するのであれば、これ以降に作成されたウズベク語の法廷文書の書式は、そもそもペルシア語文書を土台として確立したはずである。よって、ヒヴァのウズベク語法廷文書を研究するにあたっては、まず、ブハラやヒヴァのペルシア語法廷文書で使用される各種術語が、どのようなウズベク語の術語に置き換えられていったのかを検討する必要がある。

ii)ヒヴァ文書に現れる遊牧民の部族・氏族名称の中には、一見して普通名詞と区別の付かないものが見出される。ヒヴァ文書研究に際しては、これら領内に居住していた遊牧民の部族・氏族名称について一定の知識を持つことが要求される。

以上、ヒヴァ文書カタログ化作業における問題点を挙げてきた。最後に、当該文書研究の展望と課題について簡単に述べておく。まず、ヒヴァ文書研究とヒヴァ・ハーン国史研究は相互に補完しあう性質のものである。両者のうち一方の分野で研究が進展すれば、それはただちに他方の分野に多大な貢献をなすことになる。両者の研究は並行してすすめられねばならない。また、ヒヴァをはじめとする中央アジア各地の文書を比較研究することにより、中央アジア全域の文書を対象とした術語辞典を作成することも将来における重要な課題であろう。

2. 第9回研究会報告

報告者 カミルジャン・フダイベルガーノフ

「ヒヴァ市イチャン・カラ博物館古文書収集プロジェクトにおける諸問題」

「1922年 M.ニウマトゥッラーエフ作成ヒヴァ市街図」

報告者はヌールヤグディ・トショフと共に、前述の堀川プロジェクトに参加している。ヒヴァ文書のカロタグ化作業を進める中で、個々の文書に登場する街区や各種施設---モスクやマドラサなど---の位置を示す詳細な市街図を作成することになった。この報告は、ヒヴァ文書カタログ化作業と並行してすすめられている、ヒヴァの歴史市街図作成作業において現在までに得られた成果を提示するものである。

現在知られているなかで最も古いヒヴァ市街図は、18世紀前半、アブルハイル・ハーンの命令により、ロシア人技師達が作成したものであり、その後、19世紀から20世紀初頭にかけて、やはりロシア人の手により数種類の市街図が作成された。さらに、1922年にはヒヴァの地元住民であるムハンマド・カリーム・ニウマトゥッラーエフが、きわめて信頼性の高い市街図を作成した。本図は現在国立イチャン・カラ博物館に収蔵されており、寸法は縦85cm×横120cm、地図上には以下に列挙する14種のデータが記載されている。

(1)城壁(2)道路(3)水路(4)マドラサ(5)モスク(6)貯水池(7)湖沼(8)墓地(9)ワクフ地(10)住宅(11)街区住民人口(12)宗教ワクフ(13)文化ワクフ(14)ミナレット

【地図に記載される各種データについてのコメント】

(1)城壁

当時のヒヴァは二重の城壁で囲まれていた。このうち、内城壁はB.C.5-4世紀に建造されたもので、全長は2200m、内部面積は26haにおよんでおり、4つの城門が配置されていた。一方、外城壁は1842年に当時のヒヴァ・ハーン、アウラクリが建造を命令したもので、内城壁を外側から囲い込む形になっている。全長は6614mで、10個の城門が配置された(そのうち、現存するものは2つ)。

尚、内城壁に囲まれた領域を「イチャン・カラ」、外城壁に囲まれたそれを「ドウシャン・カラ」と称す。

(5)モスク

本図に記載されるモスクは79件。このうち、イチャン・カラのものは32件で、内20件が「モスク街区 mechetkaum」---ロシア語の"mechet"("モスク")とウズベク語の"qaum"("人々"。アラビア語から流入した語彙)を組み合わせた造語---を形成した。一方、ドウシャン・カラのモスクは47件で、内44件が「モスク街区」を形成した。

(8)墓地

墓地は城壁の内側、ないし、外側付近に立地している。土地の古老達が伝えるところでは、これはトルクメン・ヨムート族の襲撃から街を防御するための方策であったという。すなわち、トルクメン人達はここに埋葬されているのが聖者達の遺体であると思い込み、墓地に踏み込むことを恐れた、というのである。しかしながら、ヒヴァにおける上述のような墓地の配置は、家の塀の近くに死者を埋葬するという古代のゾロアスター教の慣習の名残と見るべきである。

(10)(11)街区と人口

本図には、上記の各「モスク街区」の世帯数と人口が記載される。これによると、当時のイチャン・カラの世帯数は908、人口は3396。一方、ドウシャン・カラは世帯数4044、人口13729となる。両者を合わせたヒヴァ市全体では、世帯数4952、人口17125となる。

(9)(12)(13)各種ワクフ物件

本図では、宗教施設を維持するために設定された「宗教ワクフ」と、学校や幼稚園など文化施設を維持するために設定された「文化ワクフ」を、それぞれ区別して記載している。尚、「文化ワクフ」は1920年の革命後に成立した制度である。

ニウマトゥッラーエフの地図は非常によくできたものではあるが、そこに記載されるマドラサやモスク等の名称が一切書かれない、という重大な欠点がある。また、これらの施設には現存しないものも多く、実地調査でその一々の名称を確認することも困難である。ところが、1924年から1966年まで当博物館に在籍していたアブドゥッラー・バルタエフが、既にこの欠を補う作業をしていたことが後に判明した。彼の孫が保管していたその手稿により、本図に記載されるほぼすべての施設の名称が明らかになったのである。

(報告要旨：京都外国語大学国際言語平和研究所嘱託研究員 磯貝健一)

ユーラシア古語文献研究叢書 1
Studies in Old Eurasian Languages 1

当研究班では活動成果公開の一環として叢書を発行します。
2002年度には叢書1が発行されていますのでご紹介します。

ロシア所蔵ウイグル語文献の研究
ウイグル文字表記漢文とウイグル語仏典テキスト

庄垣内 正弘 著

Uighur Manuscripts in St.Petersburg
Chinese texts in Uighur script and Buddhist Uighur texts

by Masahiro Shōgaito

2003年3月17日 京都大学大学院文学研究科 発行
B5版 本文374ページ 図版77ページ

ユーラシア古語文献研究叢書1 発刊によせて

吉田 豊 (神戸市外国語大学)

本書は、京都大学大学院文学研究科の21世紀COEプログラムの属する研究班「ユーラシア古語文献の文献学的研究」の計画にもとづく叢書の第1冊である。研究班の活発な活動はニューズレターで逐次報告されているが、それらとは別に、班員各自の関連する研究が著書の形で出版されることになっている。

本書の序文にも述べられているように、1990年代に入ると旧ソ連時代には見ることができなかった、ロシア所蔵の中央アジア出土文献の閲覧が可能になった。著者の庄垣内氏は、1991年から頻りにサンクトペテルブルグに行き、ロシア科学アカデミー東方学研究所サンクトペテルブルグ支所に保管された、古代チュルク語の一支であるウイグル語で書かれた文献を忍耐強く調査してこられた。そしてその調査の成果を精力的に公表されてきている。なかでも、同支所の研究員トゥゲーシェワ氏、神戸市立看護大学の藤代節氏と共同で出版した『ウイグル文 Daśakarmapathāvadānamālā の研究』京都1998は、大量の断片を集めて解読研究した労作で、扱われた文献がウイグル語仏典の中では最古層に属するものであることもあって、真にエポックメイキングな共同研究であった。一方で、これらの文献は一括してそのマイクロフィルムが(財)東洋文庫の入手す

るところとなり、庄垣内氏がリーダーとなって、ウイグル文字・ソグド文字で書かれた文献の簡単な解説を付したカタログを2002年に公にされている。ちなみに大半は10-14世紀に書かれたウイグル語仏典である。

このような共同研究以外に、氏個人も精力的にウイグル語の断片類の研究を進められ、いくつもの単行の論文で膨大な量の文献を発表されている。本書はいろいろな場所に発表された単行の論文を集めるとともに、本書のために新たに3種類の文献の研究を掲載して作られた、B5版で400頁近くにもなる大著である。しかも扱われた文献にはすべて写真版が添えられている。

本書は第一部「ウイグル文字表記された漢文仏典と漢字音の再構」(pp.1-141)と第二部「ウイグル語仏典」(pp.143-374)から成り立っている。前者は、まとまったものとしては庄垣内氏が世界で始めて解明されたウイグル文字だけで表記された漢文仏典についての研究と、それらをもとにして明らかにされたウイグル語に導入された漢字の字音の体系がテーマになっている。研究の苦労はどこにも書かれていないが、大雑把にしか発音を区別することができないウイグル文字で表記された資料から、もとの漢文を再構したり原典を比定したりするのは至難の業である。氏のこの発見によって、ウイグル人の言語生活や仏教文化のそれまで知られていなかった一端が明らかになったのであるから、この方面での氏の貢献は計り知れない。

関連する論文がここにまとめられたことは、今後の研究にとって大きな便宜となった。ちなみに、本書の出版後にも氏は、同じテーマで「文献研究と言語学 ウイグル語における漢字音の再構と漢文訓読の可能性」(『言語研究』124号, 2003, pp. 1-34)と題する論文を発表しておられる。

第二部はウイグル語仏典に関するオーソドックスな文献研究で、氏の長年培われた手腕が遺憾なく発揮されている。上述したように本書で新たに発表される文献も含まれており、このスピードで新しい文献を次々に解明してこられているのは非常な驚異でもある。この部分ではさらに、ロシア所蔵ではないが、庄垣内氏がかつて研究した『雑阿含経』のウイグル語抜粋訳と、「菩薩修行道」にかかわる長文の文献の研究を含めてある。いずれも庄垣内氏が前任校である神戸市外国語大学の出版物として発表した論文で、入手が困難になっていた。なかでも『雑阿含経』の抜粋訳は、漢文の原文のシンタックスそのままに直訳した文献で、ウイグル語に漢文訓読が存在したとする庄垣内氏の主張の一つの根拠ともなった文献であるとともに、この種の抜粋訳(実際には原文の特に難解な部分に対するウイグル語訳)の存在が知られるようになった最初の例でもあったのでとりわけ重要な資料であった。

以上、思いつくままに内容の紹介をした。なお第一部の末尾には回収されたウイグル字音のリスト、第二部の末尾には、扱われた仏典の中で、ウイグル語との対応が明らかになった漢字のリストが添えられていて、非常に便利である。庄垣内氏の行き届いた配慮に感服する次第である。

第 12 回研究会の開催について

イタリアより 2 名の研究者をお迎えし下記のとおり COE 第 12 回研究会を開催します。
皆様のご参加をお待ちしております。

☪ COE 第 12 回研究会 ☪

日時 : 2004 年 3 月 6 日(土) 午後 2 時 ~ 午後 6 時
場所 : 京都大学文学部 羽田記念館

「象形文字ルウィ語の解読の歴史と現状」

吉田 和彦 (京都大学大学院文学研究科教授)

「象形文字ルウィ語の石碑資料」

Massimo Poetto (バリ大学教授)

「象形文字ルウィ語の印章」

Natalia Bolatti Guzzo (ナポリ大学上級研究員)

編集後記

COE31 研究会ニュースレター第 5 号をお届けいたします。すでに春一番が吹き、季節が進んでいくのを感じます。

今後も活発に研究会等を企画して参りますので、皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

連絡先

「ユーラシア古語文献の文献学的研究」研究会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科言語学研究室(大崎)

Tel : 075-753-2862 Fax: 075-753-2827

E-mail: eurasia-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

Web page: <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurasia/>